

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02612

研究課題名(和文)形態・統語のインターフェイスにおける英語動詞の名詞化に関する研究

研究課題名(英文) Research on Nominalisation of English Deverbal Nouns at the Interface between Morphology and Syntax

研究代表者

濱松 純司 (Hamamatsu, Junji)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20272445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は現代英語における動詞の名詞化の性質を、形態・統語のインターフェイスの観点から、他言語との比較・史の変遷をも考慮して調査し、理論・実証の両面から多角的に解明した。ゲルマン系接尾辞・ロマンス系接尾辞の区別が英語の名詞化において果たす役割に注目して、名詞化が統語部門と形態部門のどちらで行われ、最終的にいかなる統語構造を形成するのかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The present study investigated some properties of nominalisation of English deverbal nouns in terms of the interface between morphology and syntax, compared them with their Germanic and Romance counterparts and with those at earlier stages of history and elucidated the nature of nominalisation both theoretically and empirically. It paid a particular attention to the role that the distinction between Germanic and Romance suffixes play in English nominalisation, making clear whether the process of nominalisation takes place in syntax or morphology and the syntactic structure which is formed as the product of the whole process.

研究分野：英語学(統語論・形態論)

キーワード：派生名詞 名詞化

1. 研究開始当初の背景

(1) 動詞の名詞化の現象は、生成文法理論研究の初期から取り上げられてきた。Chomsky (1970)は、語彙論的仮説に立ち、派生名詞は変形により作られるのではなく、基底部で導入されると主張し、その後の統語論研究の基礎となった。その後、GB 理論を経て現行のミニマリストプログラムに至るまで、動詞の名詞化は、統語論・形態論の双方で活発に研究がなされてきた。GB 理論の時代には、動詞への接辞付加と派生名詞への項構造の継承に関して、盛んに研究がおこなわれ、Sproat (1985)、Roeper (1987)、Randall (1988)、Grimshaw (1990)、伊藤・杉岡(2002)等、数多くの成果が生まれた。中でも、Grimshaw の研究は、派生名詞を項構造の有無により分類したもので、名詞化研究に大きな影響を与えている。一方で、GB 理論以来、様々な言語の分析に基づいた比較統語研究が発展すると共に、史的变化に関する統語研究も活発化して現在に至っている。研究代表者は、一連の研究 (Hamamatsu 1995, 1997, 2009) において、派生名詞の性質を、接辞が名詞句内の移動を認可するメカニズムの観点から明らかにした。Hamamatsu (1996, 2000)においては、英語の名詞句における属格付与の史的变化を分析する一方、ゲルマン・ロマンス諸語にまたがって名詞句の構造を比較・解明した (Hamamatsu 2002: The EPP across Germanic and Romance Languages)。

(2) 近年の名詞化研究においては、ミニマリストプログラムと親和性が高い形態理論である、分散形態論の枠組みでの研究が大変盛んである。Marantz (1997)、Harley and Noyer (2000)等は、統語部門において名詞化が起こると主張している。立脚する枠組みは異なるものの、Fu, et al. (2001)、Borer (2013)もこの点では同様の立場を取っている。中でも、Borer (2013)は、Grimshaw の提唱した3種類の派生名詞が、自身の提唱する外骨格アプローチの枠組みで、いかなる統語構造を持つかを詳細に示した、最新の研究である。この立場と鋭く対立するのが、形態・統語・意味構造が独立に表示され、かつ相互に関係づけられるとする文法の「並行表示モデル」を提唱する Ackema and Neeleman (2004)である。彼らはFu, et al. (2001)のデータを取り上げ、派生名詞が統語部門で動詞句を伴って派生される立場を批判している。Grimshaw (2004, 2005)も統語部門での名詞化には批判的である。

(3) このように、動詞の名詞化は、古くて新しい問題であると言える。従来から、動詞の名詞化は、形態・統語のインターフェイスに関わる問題として捉えられてきたが、分散形態論の登場により、近年、研究が活性化している領域であると言える。研究代表者は、

Hamamatsu (2013) において、派生名詞の接尾辞が名詞の補部、ひいては移動を認可するメカニズムを、Grimshaw (2004, 2005)の提案を基に、ゲルマン系接尾辞・ロマンス系接尾辞の区別に着目し、統語・形態の両面から検討した。

2. 研究の目的

上記の学術的背景を基に、本研究は、英語における動詞の名詞化を研究対象として、形態論・統語論の両面から、言語間の比較と英語の史的变化をも視野に入れ、多角的に検証することを目的とした。具体的には上述の通り、研究代表者自ら行ってきた比較統語論・史的統語論研究と関連づけることにより、自らの研究成果を更に発展させ、英語における動詞の名詞化に関して、より包括的な研究を行うことを目指した。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者はこれまでの研究において、ラテン系接尾辞が名詞の補部を認可し、ひいては名詞句内の移動を可能とするという仮説を立て、それを立証した。一方で、名詞句の史的变化を分析し、英語の名詞句をゲルマン・ロマンス諸語と比較・分析した。そこで本研究においては、英語における動詞の名詞化の性質を、形態・統語のインターフェイスを切り口として、ゲルマン・ロマンス諸語との比較・史的变化をも意識して調査し、理論・実証の両面から多角的に解明した。

(2) 本研究は、以下の4つのプロセスに沿って行った。

先行研究・データの収集・分析： 名詞化の統語・形態論研究は、80～90年代に研究成果が蓄積されているため、これらの先行研究を網羅的に収集した。同時に、統語論・形態論、とりわけミニマリストプログラム及び分散形態論は発展中の理論であり、変化が早い為、先行研究のみならず、研究期間中に出版される研究書・論文には常に注意を払い、これらを収集する事と関連ある学会に参加することにより、最新の研究動向に接し、吸収を図った。データの信頼性を高める為、PCを用いたデータの収集を精力的に行い、インターネットを中心にコーパスを活用した。これに加え、派生名詞の分析は、データの判断が微妙で、非母語話者には困難が予想される為、ネイティブスピーカーの内省によるデータの文法性の判断も不可欠である。電子メールを活用して、英語のネイティブスピーカーに文法性の判断を依頼した。

先行研究・データの分析・検討： 収集したデータ・資料を以下の観点から分析し、考察を加え、詳細に検討した。第一に、本研究では80～90年代の豊富な研究成果やGrimshaw (2004, 2005)等の研究等を基礎

として、ゲルマン系接尾辞・ロマンス系接尾辞の区別が英語の名詞化において果たす役割に注目して、自らのこれまでの研究成果を発展させる形で研究を進めた。次に、Marantz (1997)、Harley and Noyer (2000)等の分散形態論における研究及び Borer (2013)等の研究を検討し、Ackema and Neeleman (2004)らの批判的立場に照らし合わせ、比較・検討した。これらの研究に関わる、重要な先行研究を詳細に検討した。最後に上記で得られた知見を、ゲルマン・ロマンス諸語及び過去の時代の英語に適用し、現代英語について得られた成果の妥当性を検証した。

研究打ち合わせ： 研究計画を円滑に遂行するため、海外の研究協力者と面会し、本研究について議論し、助言を得た。本研究の進展にとって裨益したところが大きいと考える。

研究成果の公表： 研究成果を論文の形で3件、学会発表において1件、公表した。今後引き続き、研究成果を社会に広く発信する予定である。

4. 研究成果

(1) 本研究においては、以下の3点を明らかにした。第一に、接尾辞が名詞化においていかなる役割を果たしているのかについて、特に、ゲルマン系接尾辞・ロマンス系接尾辞の区別が英語の名詞化において果たす役割を検証し、後者が重要な役割を持つ点を立証した。

次に、派生名詞がどのような統語構造において現れるのかについて、名詞化が形態部門で行われ、名詞の統語構造によって名詞化の特徴が説明できる点を示した。

最後に、ゲルマン・ロマンス諸語との比較において、現代英語の名詞化がどのように位置づけられるのかを明らかにした。英語の史的变化の過程からの検証も行った。

(2) 動詞の名詞化のプロセスを通じ、形態・統語のインターフェイスを解明したことは、大きな意義があると思われる。生成文法理論の枠組みを採用しながら、統語部門での名詞化を検討することにより、形態・統語のインターフェイスの性質に迫った。名詞句と文の並行性に目配りする一方、名詞化は形態部門で行われるとの立場をより堅固なものとした。本研究において、形態論・統語論の役割分担を見直すことにより、両部門のインターフェイスに光を当てた。

(3) インターネット及びコーパスを使った独自のデータ収集に加え、ネイティブスピーカーへの調査も積極的に行うことで実証性を高めた。特に形態論研究においては、豊富なデータの蓄積が必要であり、この目的にイ

ンターネット及び大規模コーパスを利用した。これに話者の直感を加えたことで信頼性の高いデータを得ることを可能となり、結果として研究の実証性を担保することができた。

(4) 現代英語を中心としながら、形態論の領域でゲルマン・ロマンス諸語と比較・検討し、調査・分析した。研究代表者は英語とゲルマン・ロマンス諸語を対象にした比較統語論及び英語の史的統語論の研究を行ってきたが、これらの枠組みを統語論に限らず、形態論の領域において、動詞の名詞化に適用した点に本研究の特色がある。本研究は生成文法理論の初期から蓄積されてきた研究成果を生かしつつ、名詞化の領域における従来の統語・形態論研究を見直し、他言語との比較や史的变化の観点をも取り入れた、形態・統語のインターフェイスに関わる多角的な研究として位置づけられると考えられる。本研究で得られた成果を生かして、今後は研究対象を動詞由来複合語に広げ、引き続き形態・統語のインターフェイスにおける派生名詞の性質の解明を行う予定である。

引用文献

Ackema, Peter and Ad Neeleman (2004) *Beyond Morphology*, Oxford UP. / Borer, Hagit (2013) *Structuring Sense: Volume III: Taking Form*, Oxford UP. / Chomsky, Noam (1970) *Remarks on Nominalization*. In Roderick Jacobs and Peter Rosenbaum, eds., *Readings in English Transformational Grammar*, 184-221. / Fu, J. et al. (2001) *The VP within Process Nominals*, *NLLT* 19: 549-582. / Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press. / Grimshaw, Jane (2004) *Why Can't a Noun be More Like a Verb?* Paper presented at *Colloque International sur Les Noms Déverbaux*, Université de Lille 3, 23-25 September. / Grimshaw, Jane (2005) *Words and Structure*, *CSLI*. / Harley and Noyer (2000) *Licensing in the Non-Lexicalist Lexicon*. In Bert Peeters, ed., *The Lexicon/Encyclopaedia Interface*, 349-374, Elsevier Press. / 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社 / Marantz, Alec (1997) *Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon*, University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics: Vol. 4. / Randall (1988) *Inheritance*. In Wendy Wilkins, ed., *Syntax and Semantics* 21, Academic Press. / Roeper, Thomas (1987) *Implicit Arguments and the Head-Complement Relation*, *LI* 18, 267-310. / Sproat, Richard (1985) *On Deriving the Lexicon*, Doctoral Dissertation, MIT.

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

濱松 純司、英語における名詞の「同格」節及び派生・非派生名詞の区別について、専修大学人文論集、査読有、Vol. 102、2018、77 - 94

濱松 純司、動詞由来複合語内の項の実現に関する覚え書き、専修大学外国語教育論集、査読有、Vol. 46、2018、93 - 104

濱松 純司、語における句複合語について：米国ニュース教材に現れた例をめぐって、専修大学外国語教育論集、査読有、Vol. 45、2017、1 - 22

〔学会発表〕(計1件)

濱松 純司、英語における名詞のいわゆる「同格」節について、英語語法文法学会第23回大会(龍谷大学)、2015年

〔図書〕(計 件)

該当なし。

〔産業財産権〕

該当なし。

〔その他〕

特になし。

6. 研究組織

(1)研究代表者

濱松 純司(HAMAMATSU, Junji)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20272445

(2)研究分担者

該当なし。

(3)連携研究者

該当なし。

(4)研究協力者

該当なし。